



原子力研究所の 出達における一つの蹉跌



1953年暮、国際連合総会におけるアイゼンハウアー米大統領のAtoms for Peaceの演説が、軍事利用で始まった原子力を平和利用にも向けようという切っ掛けを造ったが、恐らくそれを受けてであろう、3ヶ月後改進黨代議士中曾根康弘氏が保守三派の予算折衝の中で、235百万円の原子炉築造予算を計上した。それが日本における原子力研究開発利用の始まりだと看做されている。

日本の学術の動向を見張っていた日本学術会議ではその一年半前、いわゆる茅・伏見提案をめぐって議論して以来、原子力に関する国民的決断は学術会議が握っていると思っていたのが、いわば外野でものごとが始まってしまったので、相当の衝撃を受けた。従来からあった原子核物理特別委員（朝永振一郎委員長）と新たに作られた原子力特別委員会（藤岡由夫委員長）とが具体的な衝に当たったが、後者は既成の学問の老大家の集合であって、実は原子力に素人の集り、核特委の方は現役の核物理学者が多かったから、実質的な議論できるところは核特委、あるいは朝永委員会と言った方がよいかも知れないが、物を言いたくて集ってきた連中の委員会であるから、それを統御するのは相当厄介な役であったはずであるが、朝永委員長はすべての委員に言い度い放題に発言させた上で、最後にそれらをまとめて委員長案を出すというやり方で、委員会を統御してこられた。だから、もの凄く時間がかかる。しばしば朝永委員会は深夜に及んだ。

1955年の暮、朝永委員会は大阪大学で開かれていたが、この時二つの重大な議題があった。一つは、田無の農学部敷地に予定されていた原子核研究所が住民の反対運動にあって立往生していたのをどうするか、もう一つは原子力予算で東海村に設立がきまった原子力研究所を核特委として承認し、核物理学者が嗜れて入所できるようにするかどうかの問題であった。

朝永さんは例による熟柿主義による司会で第一議題を何とか結論に持って行かれた。つまり田無住民の反対がまだ続いていても、そこに核研の設置を強行することをきめたのである。そして、やれやれ、第二議題に移れると思いきや、既に深夜になっていて、しかも前日から続いている議論の後なので、福田信之君の解散決議を朝永委員長も採用しないわけにはいかなかった。こうして、原研に日本の原子核物理学者が、正々堂々と這入れるかどうかの議論は、永久に棚上げになってしまったのである。

杉本朝雄（当時理研の仁科研、伏見の東大物理同級生）、武田栄一（東工大化学の出身、戦争終結前は阪大菊池研に居た、伏見の同僚）の二人を伏見は私の部屋に招いて前後策を議論したが、何も名案は出てこない。最後に私が言ったのは、「私も武田君も大学関係者で同僚輩下の意見をきかなければ何もできない。杉本君だけは理研で、いわば自由だから原子力研には行ってくれ」であった。

大昔の話で、私や武田さんはまだ生き残っているが、朝永さんも、杉本君も、福田君も亡くなってしまっているので、言えることではあるが、原研に初期にはいった核物理学者たちは、杉本君自身を除いてはいわば当時の核特委の圏外にいた人達で、正直に言ってすぐれた人達ではなかった（正確に言えばすぐれた人達は少かった）。その様な不幸な情勢を作り出してしまった伏見は平伏してお詫びしなければならぬが、しかしもう遠い昔の話である。原研はやはり政治家の作ったものであると言わないで、真に研究者の楽園にして欲しいものである。幸い、伊達さんのような指導者を得て、原研が「科学者たちの自由な楽園」になることを心から願っています。

〔ここに述べた歴史的事実については例えば伏見康治著「時代の証言」(国文書院刊1989)を見て下さい。もっともこれは既に絶版ですが〕。